No.153　扁平上皮癌

NHO 熊本医療センター　石原　幸治

① 症例：70 歳代、男性

② 既往歴：左尿管癌（平成 15 年）、右上葉肺腺癌（平成 26 年）

③ 臨床経過：3 ケ月来の右耳下腺部の無痛性腫瘤。徐々に増大、多発傾向のため当院に紹介受診。顔面麻痺なし。

④ 材料：右耳下腺穿刺吸引（LBC 法、パパニコロウ染色）

⑤ 細胞所見：炎症細胞（好中球、リンパ球）、壊死物質を背景に結合性強く重積性を示す細胞集塊を 3 か所に認める。所見の異なる 2 か所を強拡大で示す。1 か所は結合織由来と思われる小型で楕円～紡錘形細胞からなる集塊。もう 1 か所はライトグリーン好性、均質で透明感のある胞体を有する上皮性と思われる細胞集塊。核は類円～楕円形で中心性、クロマチンは繊細で腫大した核小体と、核膜の不整を認める。細胞間橋を思わせる像や集塊辺縁で楕円形の核長軸方向に流れるような配列が見られる。腺管様配列、粘液産生の像は見られない。角化に乏しいが、扁平上皮癌を疑った。

⑥ 組織所見：大小の胞巣状増殖形態を示す異型細胞の増殖が窺える。角化に乏しいが、細胞間橋が見られ分裂像を散見する。胞巣周囲は炎症細胞浸潤と線維性変化が見られ、部分的に壊死に陥った個所も見られる。扁平上皮マーカーp40 に陽性、胞巣内には明らかな粘液含有細胞は認めない（ムチカルミン、アルシアンブルー）。リンパ節転移を伴う低分化扁平上皮癌と診断された。多臓器からの転移の可能性を検索する必要がある。

⑦ 鑑別点：

＜多形腺腫＞間質成分と上皮成分、双方が見られる点で鑑別に挙げた。多形腺腫の間質成分は Pap 染色で半透明、ライトグリーン淡染（MG 染色ではメタクロマジーを示す）で異なり、上皮成分も腺系には見えない点で除外した。

＜ワルチン腫瘍＞炎症細胞を伴う壊死物質を背景に見る点で鑑別に挙げた。上皮成分が好酸性顆粒状胞体を有する円柱上皮細胞とは異なるため除外した。

＜基底細胞腺腫＞結合性の強い細胞集塊という点で鑑別に挙げた。集塊辺縁の柵状配列や基底膜様物質が明らかでないため除外した。

＜腺房細胞癌＞結合性の緩い腺房様配列を呈していない事、核の偏在性が見られない事より除外した。

＜粘表皮癌＞低異型度の場合、扁平上皮成分と粘液細胞、その中間的な細胞が出現するが異型に乏しい。本症例は扁平上皮と思われる成分は存在したが、幾分異型が見られた事と粘液細胞の介在を認めなかった事より除外した。高異型度になると粘液細胞の割合が減り、細胞異型が強くなる点で鑑別が困難な場合がある。

＜腺癌＞耳下腺腫瘍の分類上、「腺癌」という分類はなく、基底細胞腺癌、嚢胞腺癌、多形低悪性度腺癌、唾液腺導管癌等がある。それぞれに特徴的所見を見るが、特定が困難な場合は腺癌 NOS を用いる。本症例は腺癌の類とは異なる像であり除外した。

⑧ 文献：河田了（耳下腺腫瘍の診断と治療）、大阪医科大学（耳鼻咽喉科・頭頸部外科ホームページ）、篠原出版新社（細胞診断マニュアル）、医療科学社（頭頸部・口腔細胞診アトラス）